
Wa1Kure heart's

ドライ・ビュントニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WalKure heart's

【Nコード】

N5734B

【作者名】

ドライ・ビュントニス

【あらすじ】

これは少し昔の物語。魔法国家と科学国家との間で「セイバー大陸間戦争」と呼ばれた戦いが勃発した。その戦争で未曾有の戦果をあげた者達が、魔法国家プレア王国のワルキューレ隊である。聖女の再来は、戦後もプレア王国の伝承として長く語り継がれている。しかし一説によると、とんでもない問題集団だったと指摘する記録が残っていた。開戦前からワルキューレ隊を指揮した一人、フィルデガルド・ライアンバーグ直筆の書籍に。歴史の裏側は、奇しくも理想とは掛け離れた史実となるのだ。今、ワルキューレ・ハーツと

記された書物が紐解かれる……

プロローグ

ワルキューレ。

それは古来から、聖女を指す名称である。

容姿は比類の美しさを誇り、厳然としつつも慈悲深く寛厚な気質を備える。また一度、武器を振るえば、一騎当千の実力。

人々から崇拜され、同時に国の象徴としても祭り上げられるような人物であつたと伝えられている。

それから幾年もの月日が流れた現在。

恒久的に受け継がれた聖女の実在は、戦役の一時終結と共に再起しようとしていた。

その筈なのだか……。

蒸し暑い季節。

青空を背景に背負って立つ太陽が、大地を俯瞰する。

そこには建物がある。

ただの民家。何らかの施設。堅牢そうな城。

多くの建物は寄り添い、形を成している。

村。街。小国。大国。

そこには人々が独自の生活を営んでいる。

平民は自らの仕事を全うし、商人は店を出し、兵隊は街を徘徊し、

王族は国の政治についての会議。

そんな世界の一端にしか過ぎない場所に、魔法により発展した国がある。

ブレア王国だ。

整然とした町並みは、豊かな樹木に囲まれている。立派な橋を通した先には巨大な門となっており、その更に先に在るのは城だ。

周りに広大な敷地を有し、そこも緑に富んだ様相である。

その一角。

国王直営第二十三法術訓練所——通称『ニーベルング学園』と呼ばれる施設がある。

次世代のワルキューレを育成するための場に、今、候補である六人の美少女たちが居た。

学園の中央にあたる噴水広場。

そこに見える人影は四つ。全員が白と青の二色を基調とした統一の制服に身を包んでいる。

「隊長はいつ頃、集合するって言ってた？」

胸の前で腕を組んでいた、金髪ツインテールの少女が他の三人に問い掛ける。端正な面差し。爛々と強い意志を持つ、綺麗なグリーンの瞳をしている。

きちんと着こなした制服からは、女性特有のラインが生まれている。

「んー？ エリシアは知らないよ？」

いち早く答えたのは、噴水の石段に腰掛けていた赤髪の少女だった。

彼女はエリシア・キャティー。

赤い髪の毛を左右の長さの均等ではない御下げにし、肩の内側に吊している。顔付きや体格が幼く、足をブラブラさせる動作も堂に入っている。

エリシアは、ちよいつ、と顔を左に向け、

「ラピスは？」

と可愛く張りのある声で訊く。

ラピスの容姿は、色素の薄い、落ち着いた金髪。その髪型は少しウェーブの掛かったショート。瑠璃色の双眸。

それなりに起伏のあるボディで、左手首には青い宝玉の付いたブレスレットを付けている。

ラピス・ヘーミニスは瞬時に首を傾げた。

「私も知らないわよ？ アイゼリアはどうなの？」

ラピスの視線に合わせ、ツインテール娘とエリシアも、そちらに目をやる。

向かった先には、おっとりした表情の女性が居た。藍色の長髪。筋の通った高い鼻梁。魅き付けらそうな朱唇。抜群のプロポーシオンを誇る。

アイゼリア・エンシェロールは、眉尻を下げ、

「ごめんなさい……。私はミーナさんに集合場所を教えて頂いたものですから……。てつきりミーナさんがご存知なのかと……」

申し訳なさそうに目を伏せ、耐え切れなくなったのか続きを呟いた。

「他人任せだなんて……。私ってダメですよね？ ダメな人間ですよね？」

どうやら自虐思考が強いようだ。

いつも通りの反応なのか、エリシアとラピスはそれを放って置く。そして問題のツインテールこと、ミーナをじいーっと見る。

顔を背けたミーナにラピスが、

「集合時間くらい知ってなさいよ」

「何よ、その棚上げ発言！ ラピス……、貴女はその自己中な性格を直しなさい！」

「な……！？ あんただって、そうじゃないの！ それもジコ虫よ、ジコ虫！」

「その妙にム力つく発音は止めて！」

睨み合う二人の様子を見たエリシアが、間に割って入った。

「もうー、二人とも止めなよ？ どっちもどっち」

容姿とは逆に、最も大人びた対応をする彼女に、二人の槍声が飛ぶ。

『うるさい、おチビ！』

「ぶー！ チビとはなんだー！」

頬を膨らませ、二人の周りをピョンピョンと跳ねて講義する。

エリシアまで乱入し、ヒートアップしてきた場に、声が掛かった。その声はアイゼリアのもので、

「喧嘩はいけませんよ、皆さん……」

諭すように優しく響いた。しかし今の三人には火に油。

『うるさい!』

一蹴され、アイゼリアは地面に体育座りして、いじけてしまった。もはやストッパーもいなくなり、喧々囂々となった広場。

「もう我慢できないわ! 勝負よ!」

ミーナはラピスをビシッと指差して言った。

「いいわよ……掛かってきなさい!」

ラピスは不適な笑みを浮かべて応じる。エリシアは視界にすら入ってない。

両者は距離を取って構えると、同時に加速した。

その時――

「そこまでっ!」

二人の側面から飛んできた鋭い一声に、誰もが身を竦めた。一斉に喧嘩を止めた二人は、近付いて来た足音の主を見た。年は二十代前半といったところか。短く刈った茶色の髪。油断ない、鋭い目付き。真一文字に引き結んだ唇は歪まない。

『フィル隊長……』

二人に加え、アイゼリアも声を揃える。だが、エリシアだけは、

「お兄ちゃん!」

トテトテと可愛らしく走っていく。

フィルデガルド・ライアンバーグは、その様子を見つめてから、正しい行動を取った。

エリシアの額に手を当て、接近を拒否。

エリシアは力づくで前進を遂行するも、やはり無理。その内に不機嫌となった彼女は、キツと睨む。

それからフィルの向こう脛を爪先で蹴り飛ばす。
堪らずに、脛を押さえて跳びはねるフィルに、

「意地悪っ！ このロリコン野郎！」

仮借ない言葉を浴びせる。

一方、いきなり隊長の威厳が損なわれる危険に見舞われたフィルは、直立に戻る。

「隊長になんてことをするんだ。しかもロリコンとは人格否定も甚だしいぞ、エリシア」

フィルが言い終わると、エリシアは怪訝な目をする。

「ならなんで無断で部屋に入ったの？ あまつさえ、頭にエリシアのパンツ被って」

「あれなら何度も説明した筈だ。君の生活週間を調査していたらパンツが出て来たので、置く場所に困った私が才知を奮い、適切な処理方法を考慮した結果だと。この方法は実用性が高く他の者たちも同様に行った。しかるに差別もしていないので、不平もないだろう。なんら問題はない」

事もなげに捲し立てたフィル。これには全員が冷たい視線を浴びせた。

そんな折。

フィルの影となっていた少女が、静かに顔を出した。
透き通るような白皙。縁の無い眼鏡の奥で、異様に光る黄色の瞳。
艶のある黒髪が腰まで流れる。

整った顔立ちだが、その表情は冷たさを感じさせる。

「隊長……。主旨、逸れ……」

伶俐で物静かな声。

少々、言葉足らずだが、フィルは理解したようで、すまない、と言い、

「シェリル・リス。先程の下着の処理方法について上層部に提言してくれ。勿論、発案者が私であるとの記入漏れなく」

シェリルはフィルの真剣な目を確認した上で、ボソツと囁いた。

「……変質者。……逮捕」

冷酷なツツコミをも無視し、フィルが声高らかに少女達に告げた。

「いいか、皆。チームの調和を乱してはならない。もしもそんなこととする奴には、私は断固とした処分を降す」

精神的に最も乱した男がこれではある。いっそのこと清々しくも思えるが。

皆の疑念を置いてけぼりに、本題に入ろうとしたフィルが、あることに気付いた。周りを入念に見回してから、一呼吸。

「ラスリの姿が見えないようだが……どうしたんだ？」

フィルは一瞬も迷わずラピスに問い掛ける。

「知らないわよ……」

眉を立て、無然とした態度で言った切り黙り込むラピスに、

「貴女の担当でしょ？ どうせ寝坊なんだから、起こしてきなさいよ」

突っ掛かるのは、ミーナだ。ラピスは腕を組み、ミーナに言い返す。

「朝に起こそうとしたわよ。でも垂直落下ラピス・バーストやつても起きなかったわ……」

「あの踵落しで起きないなんて、どういう神経なんだろうね？」

エリシアがケラケラと笑う。

「家畜なみ……」

またしても冷酷なシェリス。

「よし。ラスリを起こしにいくぞ」

もう慣れた、と言わんばかりの決断の早さで、フィルは踵を返した。

直後。

ニールング学園の一部で、大爆発が起こった。

衝撃で屋根が空へと飛び、黒煙が噴き上げる。突然の大惨事に全員が啞然とした。

すると黒煙を尾に引いて飛んできた人影が、フィルの足元に落下した。

その正体を理解したラピスが溜息を吐いた。

「うきゅん……ちょっと火力が強すぎたかなあ？」

ぐるぐる線を目に付けて登場したのはラスリである。

容姿はラピスとそっくりだが、ブレスレットは右手首に付けている。

ラスリはラピスの双子の妹なのだ。先程、フィルが真っ先にラピスに問うたのは、これが理由だ。

そのフィルは地面に倒れているラスリを眺めてから、口を開く。

「遅刻だぞ。ラスリ」

「あ……、お客さんですね？ お勧めは、この現地直行、目覚まし時計です。寝起きも抜群！」

その筈が、まだ寝ぼけているラスリ。

「あんな凄まじいパフォーマンスを見せられた直後に購入する人間はいない。それに上官に何を売ろうとしているんだ、君は」

「へ？ ……た、隊長！？ これは失礼であります」

地面に這ったまま敬礼するラスリを見て、エリシアが腹を抱えて笑い転げた。

「更に無礼を重ねたようだが……まあ、いい。しかし……」

フィルは言葉を切つて、学園の方向を眺めた。遠くからでも、燃えているのが解る。

「また営倉入りだな、私は……」

「隊長、可哀相う……」

「あんたが言うな！」

ラピスの踵落しがラスリの後頭部に炸裂した。
急いでラスリを治療するアイゼリアを一瞥してから、フィルは歩き出す。

その背中はどこか物憂げだ。

エリシアが横に並んで、肘で脇を突きながら、

「これで五十回目の営倉入りだね？ 伝説達成おめでとー！。そんなお兄ちゃん……す・て・き！」

「エリシア。君の発言からは並々ならぬ悪意を感じるのだが……。あとお兄ちゃんと呼ぶのは止めるんだ」

エリシアは悲しそうに俯き、

「うん……。解ったよ……。じゃあ……、お義兄ちゃん……」

フィルが無視すると、突きがフックに変化した。
腹部を押さえて片膝を衝いたフィルは、こう思う。

（なぜ私は、今こうしているのだろうか……）

こう見えてもフィルは優秀な軍人なのである。軍学校を主席で卒業し、将来を約束された筈の逸材だった。

それが、どこで道を間違えたのであろうか？ 着任直後に、ミーナの着替えを覗いてしまいビンタを受けた時からか？ それとも、ラスリの『おませさん地雷』を運悪く踏んだ時からか？

いや、国王陛下との謁見の時からだ。

あの時の会話はよく覚えている。

『フィルデガルド・ライアンバーグよ。そなたにワルクューレ隊の隊長の任を与える』

思わず身が奮える程に嬉しかった。

『はっ、身に余る光栄に存じます』

この言葉に偽りなどあろうものか。粉骨砕身で、任を全うするつもりだった。だからこそ思う。

（なぜ私は、今こうしているのだろうか……）

それは誰にも解らない。ただ、誰にでも理解できることがあった。

今日の訓練が終わり次第、彼は粉骨砕身の結果、営倉入りするということである。

プロローグ（後書き）

色々とあり遅れましたが、先頭はネビリム三世が勤めさせて頂きました。ワルキューレ・ハーツを宜しくお願いしますm（――）m

episode : 1 戦乙女（前書き）

今回執筆を担当させていただきました大和です。
さて今回はこの世界の状況とワルキューレ隊の戦闘がメインになります。

後半から戦乙女達の大喧嘩が見られますので楽しみに（笑）

episode : 1 戦乙女

燦々と照りつける太陽。人々は皆その暑さに対抗するためある者は薄着、またある者は裸同然の格好で今日という日を楽しもうと必死である。

だがその光景に違和感はない。むしろ自然と言えるだろう。

――ある一点を除いては。

ブレア王国のとある地方、違和感はそこにあつた。

皆暑さに喘いでる中、2人の男性がある場所に向かって歩いていた。その服装は違和感を形にしたような格好である。

1人は濃い茶色のコートを羽織り、鍔のついた帽子を深く被っている。もう1人は黒いコートにサングラスをかけ、同じく鍔つきの黒い帽子。

まるで季節に合っていない2人は町行く人々の注目の的だ。

「…あー、クライブ君？この格好はさすがにやりすぎではないかね？」

茶色のコートの男性が、後方に付き従う黒いコートの男性に問いかけた。

「いえ大佐。何事もまずは形から入る事が大切です」

黒いコートの男性はさも当たり前のように答えた。

「あゝ…せめて帽子だけは勘弁してくれんかね？暑くてたまらん」

そう言うと茶色のコートの男性は答えを待たずして帽子を脱いだ。

彼の名はリーバス・レミントン。ワルキューレ隊設立の責任者であり、ニーベルング学園創立者である。

年齢は50前半くらいであろうか。白髪混じりの黒髪、蓄えられた白髪混じりの髭。深く刻まれた皺は、彼の今までの生涯を物語っているかのようだ。

「そうですか。では私も……」

そう言つて黒いコートの男性も、その帽子を脱いだ。帽子の下彼の金髪が、黒いコートと不協和音を奏でると思いきや、意外と違和感は少ない。

彼の名はクライブ・プラッシャー。リーバスの部下で、頭の切れる策士である。金髪をオールバックに撫でつけ、清潔感溢れる精悍な顔つきをした男性だ。年齢は20後半くらいだろうか。

リーバスは立ち止まると、クライブが帽子を脱ぐ様子を見て安心してような笑みを浮かべる。

「……何か？」

クライブが怪訝な表情を浮かべて問う。

「いや、この格好ではどこかの重役が機密任務でもしているようだな。君も帽子を脱ぐということは、私が狙われる心配はないのだからな」

ははっ、とリーバスは軽く笑い、歩き出す。

ちなみにこの2人、一応プレア王国の軍人である。リーバスは大佐、クライブは少佐だ。

このようなふざけた格好では、プレア王国の軍人は仮装趣味でもあるのかと疑われてしまう。が、実はこの格好、クライブの策略でわ

ざとしているのであって、決してふざけている訳ではないのだ。
現に、誰一人としてこの2人をプレア王国の軍人であると思うだろうか。真夏にコートを羽織るような2人は変人くらいにしか思われず、返って都合がよい。

クライブがそこまで考えているのを知ってか知らずか、リーバスは脱いだ帽子ではたばたと扇ぎながら、目的地を目指す。

――――

『ニーベルング学園敷地内』

リーバスがここに来た理由は2つある。自分の設立した部隊をこの目で見てみたい、不自由してはいないか確かめたいと前々から思っていたのが1つ。もう1つは自分の部下であり、その部隊を指揮するフィルデガルド・ライアンバークが、リーバスを招待したのだ。執務室に届いた手紙を思い出す。

『リーバス・レミントン大佐ー　月日は流れ、私がこのワルキューレ隊を指揮するようになってからもう半年です。次期ワルキューレとなるべく少女達も日々厳しい訓練をこなし、立派に成長しつつあります。是非一度いらしてください。ワルキューレ隊一同、心から歓迎いたします。ーフィルデガルド・ライアンバークー』
なんと手紙を読み直し、執務室で1人にやけたことか。思い出しただけで頬が綻んでくる。

おじいちゃんが孫に会う時の‘アレ’だ。

「リーバス大佐。おじいちゃんの顔になってますよ？」

「む？そうかね？」

クライブにズバリ指摘され、リーバスは頬を軽く叩いて平静を装う。

今更のような気もするが……。

「リーバス大佐は軍人に向いていませんね」

クライブは表情を変えず淡々と言った。リーバスは顎に手をあててうーん、とうなり、

「かもしれんなあ……」

などと口にする。2人のやりとりは端から見ると冗談なのか本気なのか、はかりかねる所がある。

「定年後は教務にでもついたらどうです？幼稚園とか」

「いいねえ。子供の相手をするのは大好きだしな」

はっはっは、と、リーバスは豪快に笑う。

「冗談だったのに……。まさか大佐は本当にロリコ……」

クライブがそこまで言いかけたところでリーバスが突然振り向き、にやりと笑う。

「クライブ・プラッシャー少佐。今の発言は聞かなかった事にしよう」

「了解しました、リーバス大佐」

クライブが敬礼すると、リーバスはまたにやりと笑って歩き始める。やはりこの2人、端から見ると理解に苦しむ。しかし本人達にとっ

てみればごく当たり前なのだろう。何事も無かったかのように、2人は学園へと向けて広い敷地内を歩いていた。

しばらく歩くと、青い屋根の白い建造物が見えてきた。そう、『ニールング学園』である。伝説の戦乙女にちなんでワルキューレ隊と名付けた少女達が日夜厳しい訓練を積み、この国のためにその身を捧げている学び舎……のはずなのだが…。

「……クライブ君？」

「はっ、何でしょう大佐」

見える建造物はその半分がどこにも見あたらず、消し炭となっている。

「私にはせっかく立て直した校舎が半分無くなっているように見えるんだが……君にはどう見えるかね？」

目を擦ったり細めたりして何度も校舎を見直すリーバスの横で、クライブは淡々と一言。

「無くなってますね」

「むむむ…やはりそうか」

リーバスは考えた。厳しい訓練には危険が伴う。ヒートアップした生徒が誤って吹き飛ばしてしまったのだろう。我がワルキューレ隊の為だ、多少懷は寒くなるがなんとか予算を調達して直してやろうじゃないか。

そう考えると多少の出費は痛くない。

孫にどうしても高いおもちゃを買ってあげたくなるおじいちゃんの
「アレ」だ。

と、その時、学園の近くにある広場から何やら怒鳴り声が聞こえてくる。しかもそれは少女のものだ。リーバスとクライブは声の方向へと視線を移し――絶句した。

「あー……クライブ君？」

「何でしょう大佐」

「あれが我がワルキューレ隊かね？」

「……そのようです」

そこで、クライブとリーバスが目にしたものは……。

――――

――時間は半時ほどさかのぼる。ちょうどリーバスとクライブが帽子を脱いでいた頃だ。

ニーベルング学園の広場に、7人の男女の姿があった。

「あゝ、ごほん。いいか、ワルキューレ隊の諸君」

わざとらしく咳払いをしたのはワルキューレ隊の指揮を勤めるフィ
ルデガルド・ライアンバーグである。

今日はようやく営倉から出る事ができた彼の復帰初授業だ。

とはいえ、フィルが営倉入りの理由となった『現地直行目覚まし時計事件』により、ニーベルング学園の校舎はその半分がいつも授業に使っていた教室もろとも焼失していた。

残りの半分はワルキューレ隊の宿舍や備品室であり、とてもではないが（フィルはそれでいいと言ったが、ワルキューレ隊の面々はそれを断固拒否した）授業には使えない。

そこで思案をめぐらせた結果、天気にも恵まれていることだし、外で授業をしようという事になったのだ。無論、暑さには耐えねばならないが……。

「我々ワルキューレ隊の設立理由はわかるな？」

軍服の夏用をきちんと着こなしたフィル。その姿からはこの以上な程高い気温は感じられず、彼の周りだけ気温が低いのではないかと錯覚してしまうほど清々しい。しかしワルキューレ隊の面々は二ーベルング学園の制服を着用に及んではいるものの、それぞれが好き勝手に着こなし、授業態度も思い思いの場所・格好で受けていた。

「はいはい！」

と、暑さにめげずに手を上げたのは噴水の端に腰掛け、吹き出る水で涼んでいたミーナ・N・ヴァンシュタインだ。

「よしミーナ、言ってみろ」

フィルは腕組みをしてミーナに問いた。

ミーナは噴水から立ち上がると、こほんと咳払いをする。

「ヴェルダー戦役においてノーマノイド国家であるアルバトロス帝国に我が軍は壊滅的被害を受けました。それによって低迷したブレア王国軍の士気を向上させるため、私達自身が伝説の戦乙女『ワルキューレ』となるのがワルキューレ隊の設立理由です」

身振り手振りを織り交ぜ、劇的に発表してみせるミーナ。しかし答えとしては完璧だ。

フィルは腕組みをしたまま満足気に頷く。

「よし、いいぞ。他にはいないか？」

「はいっ！」

次に手を上げたのは木陰で妹と共に座っていたラピス・ヘーミニスである。

「ラピス、模範的回答は出てしまったぞ？それを上回る答えを言えるんだな？」

「もちろんよ！」

「お姉ちゃん頑張ってるよ」

自信満々のラピス。妹のラスリは手で拡声器をかたどり、激励の言葉をかけた。

「5年前のヴェルダー戦役でブレア王国とノーマノイド国家の戦力バランスは大きく変化しました。今まではノーマノイドに我が軍の魔法障壁を突破する事は不可能だったからです。ヴェルダー戦役ではノーマノイド国家連合軍にこの魔法障壁を突破され、それによってシャーマノイド陣営は戦線の形成がままならず後退、ミエナ攻防戦では包囲殲滅されてしまっています。この事から我が軍の戦力強化が計られ、近代的で強力な部隊を作るという理由で私達ワルキューレ隊が設立されました」

「ん、現在のプレア王国の現状を的確に捉えた素晴らしい解答だぞ、ラピス」

「お姉ちゃんかつこい」

満足気に頷くフィルと大袈裟に喜ぶラスリに笑顔で応えると、ラピスはちらりとミーナに視線を移す。そして……。

にやり。
勝ち誇った笑みを浮かべてみる。ミーナはというとカチンと来たらしく、不機嫌を顔に貼り付けてぶいっとそっぽを向いてしまった。

ラピスとミーナの発表にしばしば登場したシャーマノイド・ノーマノイドという単語だが、これは主に人種の事を指している。

シャーマノイドとは魔法を使用することができる人間の事を指し、ノーマノイドとは魔法が使用できず科学に頼った人間の事を指す。

この他に『渡来人』という人間がいる。『渡来人』とはこの世界とは別の世界から来た人間のことで、何らかの理由、方法で平行する別の世界から来た人間を指す言葉である。しかしその理由、方法は全くの不明であり、魔法と科学でも未だに説明されていないのが現状である。『渡来人』自身も、気づいたらここにいたという者達がほとんどである。

そしてもう一つ、『ヴェルダー戦役』。これはシャーマノイド陣営とノーマノイド陣営の抗争の名である。

ヴェルダー戦役は聖暦263年、フォーク洋を隔てたサフレッジ大陸の大国ヴィルディア王国領内で『ノーマノイド』が北部アルバトロス地方の大都市ヴェルダーにて大規模な反乱を起し『アルバトロス帝国』の独立を宣言したことから始まった。最初、ヴィルディア王国側は「独立軍側は地方軍閥を中心とした小規模な戦力しか

有していない」と考え、事態は簡単に鎮圧できると予想していた。しかし、アルバトロス帝国は同じ『ノーマノイド』国家であるアイソルト帝国に支援を受け、最新式の銃火器に野戦砲、さらには航空機、戦車までも装備していた。

開戦以前からアルバトロス独立派とアイソルト帝国は結束し『シャーマノイド』に対抗するために支援を惜しまなかった。そして、戦車や航空機の運用にはそれ相応の運用技術が必要であるためアルバトロス反乱軍はアイソルト帝国内で秘密裏に訓練を受けていた。最新の兵器と訓練された大兵力。この予想以上の戦力に加えさらにアイソルト帝国軍一個師団がアルバトロス支援のため派遣され、263年の秋にヴィルディア軍との大規模な軍事衝突がはじまった。

開戦と同時に、戦車を中心としたアイソルト軍機甲師団は航空機の支援を受けながら電撃的な速さで進撃を開始。攻勢のままアルバトロス・アイソルト連合軍はヴィルディア首都ミエナ近郊まで侵攻した。これに対し、友好国であったプレア王国は新設されたばかりの法術師団をヴィルディアに派遣した。プレア法術師団は強力な攻撃魔法と強固な法壁を作り出すことのできるプレア王国軍の精鋭である。

さらに、ヴィルディア軍はプレア軍のほかにも近隣の魔法国家から増援を受け戦力を整え法壁によって敵を封じ込めた後、科学国家陣営を駆逐するための体制を整えつつあった。しかし、全軍の戦闘体制が整わぬうちに魔法国家陣営の予想もしていなかった事態が発生した。ヴェルダー戦役で敵科学国家陣営は法壁を突破する方法を発見したらしく各地に張り巡らせた法壁が次々に無力化されたのだ。その為、想定外の先制攻撃に混乱した魔法国家陣営は戦線を形成することもできず包囲されプレア王国遠征軍も含め壊滅するという結果となった。アルバトロス帝国は事実上独立を果たし、ヴィルディア王国は壊滅的打撃を被った。その後、敗戦によって衝撃を受けた魔法国家陣営は急遽、軍備拡張を推し進め科学国家陣営と対立する姿勢を強くとっていくこととなった。

「……これが、『ヴェルダー戦役』である。これにより低迷したプリア王国軍の士気を回復する目的で設立されたのがワルキューレ隊である訳なのだが、実はミーナやラピスの言うような輝かしい理由で設立されたのではなく、伝説の戦乙女を鵜呑みにしたプリア国王が独断で設立を決定した、軍上層部にしてみれば言わば厄介者である。」

フィルはこの事をリーバスから聞かされていた。だからこそ、彼女達には軍上層部を見返す事ができるくらい素晴らしい部隊になつてほしい。そのために自分は粉骨碎身の精神で今まで力の限り努力してきたのだ。

しかし……その結果が記念すべき50回の営倉入りという記録である。この記録は未だに破られていないし、現在記録更新中である。先を思うとフィルの頭は拒絶反応を起こし、頭痛がしてくる。

しかし、今日のフィルは一味違った。理由は不明だが、やたらとポジティブ思考だったのだ。

50回の営倉入りがなんだ！

彼女達のためならば何回だろうと入ってやろうではないか！

見る！天気まで自分を応援してくれているではないか！

その時、今まで晴天だった空に雲がたちこめ始めた。

……不安である。ちなみに……今日、リーバス達が視察に訪れる事はフィルを含めワルキューレ隊全員知るよしもなかった。

「さて、模範的解答が2つも出た所で……アイゼリア、君はどう思う？」

地面にピクニックなどに使うシートを敷き、静かに授業を受けていたアイゼリアにフィルは問うた。

「わ、私ですか？えっと、その……私は……」

ワルキューレ隊全員の視線を浴び、アイゼリアの頬がみるみるうちに朱に染まっていく。

「私は……戦わないで済むのなら、なるべく戦いたくありません……でもだめですよ？皆さん頑張って戦っているのに、私だけ戦わないなんて……」

持ち前の自虐思考で、アイゼリアは俯いてしまう。フィルはそんなアイゼリアを見つめ、苦笑をもらす。

「何を言ってるんだ、アイゼリア。君はこの中で一番素晴らしい解答をしたんだぞ？」

フィルの言葉に、アイゼリアは驚いて顔を上げる。

「戦わないで済むのなら、誰だって戦いたくないさ。我々が真に望むのは平和だからね」

フィルはアイゼリアの肩に手を置き、彼女を見つめた。

「君は間違っていない。自信を持ちたまえ」

アイゼリアの頬がますます赤く染まり、恥ずかしさからかまたも俯いてしまう。フィルは苦笑し、アイゼリアの藍色の髪をくしゃくしゃと撫でてやった。

——そんな2人の様子を面白くなさそうに見つめる赤毛の少女。

（何よ、お兄ちゃんったら！私という者がありながら！）

エリシアである。彼女は木の枝に腰掛け、頬を膨らませながら『私を見てビーム』をフィルの背中に放った。
真夏だというのに、フィルが寒気を覚えたのは言うまでもない。

「さて、と」

そんな寒気を振り払い、フィルは立ち上がって声を張り上げた。

「戦わずに済むのならそれにこしたことはないが、そうも言ってもらえないのが現状である。したがって今日は君達に模擬戦を行ってもらう」

えっ、と、アイゼリアとシェリル約2名を除いたワルキューレ隊全員が気だるそうに声を揃えた。しかしフィルは動じたふうも無く続ける。

「君達の晴れ舞台に向けての予行演習だ。何か文句はあるか？」

そう言つてフィルはワルキューレ隊全員の顔を見回した。無表情な者、驚いている者、あからさまに嫌そうな者、「い」がほとと表情はそれぞれだが、誰一人として反抗する者はいない。

「よし、決まりだな。これよりチーム分けを発表する！私の独断と偏見に満ちているが文句は言わないように！」

どうやらいつもの事らしく、少女達はふぁっい、と気の抜けた返事を返した。

「まずは…アイゼリアとエリシア！」

名前を呼ばれた2人は顔を見合わせるが、エリシアはすぐにぶいっ

とそっぽを向いてしまった。どうやらフィルと仲良くしたのが気に食わないらしい。

「次は…ラスリとシェリル！」

「はあゝいゝ」

「……了解」

なんだかんだ言っただけで楽しそうなラスリと、全く感情の読めないシェリル。異色のタッグが誕生した。
これで残るは2人。もはや決まったも同然。

「最後は…」

「ちょ、ちょっと待ってください！私がラピスと組むんですかあ！？」

声を荒げて反論したのはミーナだ。普段からあまり仲の良くないラピスと組まれたのが気に食わないらしい。トドメは先ほどの勝ち誇った笑みだ。

「何よ！私だってあなたとなんか嫌よ！隊長！代えてください！」

ラピスも不満らしく、フィルに詰め寄る。
しかしフィルは涼しい顔で、

「いゝや、だめだ。言っただろう？独断と偏見に満ちているって」

『納得できません!!』

2人の仲が悪い、息のあったコンビネーションにさすがのフィルもたじたじと後ずさる。

「大体何よ！！さっきの勝ち誇った笑み！優等生ぶっちゃってさ」

「そっちこそ！あんな基本中の基本しか答えられないワケ！？それによくワルキューレ隊に入れたわね？」

「なんですつてえ！？第一、どこからそんな情報仕入れたのよ？国家機密満載の危険度Aクラスの解答じゃないの！！」

「そんなの常識よ。少し頭の良い生徒なら、これぐらいの情報簡単に入手できますうゝ」

「ふんっ！大方、軍の官僚でもつかまえて、色仕掛けでもしたんでしょ！？」

「な、なんですつてえっ！？」

「何よ！やるつての！？上等じゃない！！」

もはや2人のボルテージは最高潮。誰にも止めることはできない。しかし、果敢にも間に割って入ろうとする2人の勇者がいた。

「こ、こらおまえ等！止めないか！」

「喧嘩はいけませんよ、ミーナさん、ラピスさん……」

『うるさいっ！！』

フィルは垂直落下ラピス・バーストと横一文字ミーナ・トルネードのユニゾンキックを食らい吹き飛ばされ、アイゼリアの隣すれすれを通過し校舎の方へと消えていった。

アイゼリアは2人の剣幕に圧され、すごすごと引き下がる他に助かる方法は無かった。

「もゝあつたまきた!!」

ラピスは二の腕に巻かれていた銀の装飾品に手をかざす。すると装飾品は一瞬光を放ったかと思うと、次の瞬間には銀色の鞭となってラピスの手に収まっていた。

豪華に飾られた銀の柄に、しなやかに揺れるとても柔らかい金属で構成されたそれは、まるで生きた個体のようにひゅんひゅんと空を切っている。

これがラピスの得意とする得物、『アングウイス』だ。

腰に手を当てて立つラピスの堂々たる姿に、この武器はぴったりである。

「ふんっ、いつ見ても下品な武器ね」

ミーナはラピスの武器を一瞥し、そう一言吐き捨てる则自分の得物に手を伸ばす。

両方の太もものホルダーに収められた2対の拳銃。Colts・A・A45（コルト シングルアクションアーミー）である。型式よりも『ピースメーカー』の愛称で有名な、なんともクラシカルなリボルバータイプの拳銃だ。

片方は銀色、もう片方は金色で、両方に薔薇の装飾が施されている。まるでこの2丁の銃は、2つで1つだと自ら誇っているようだ。

ミーナはそれを器用にクルクルと指で回し、2つの銃口を同時にラ

ピスへと向ける。

「そっちこそ、いつ見ても野蛮な武器ね」

ラピスも負けてはいない。2人の毒舌はシェリルとエリシアにも引けを取らないほど、歯に衣着せない言いぐさである。

「いくわよ!!」

先に動いたのはラピスだった。ミーナに向かって加速し、アングウイスを振るう。

ミーナは神速の速さでハンマーを上げ、トリガーを引いた。すると銃口からは弾丸ではなく、薄緑色の球体がいくつも飛び出してくる。これが彼女の魔法である。収束した魔力を手のひらを通じてピースメーカーに送り込み、弾丸として撃ち出す。そのため普通ならば6発の装弾数を、彼女の魔力が続く限り何度でも撃つ事ができるのだ。銃口から吐き出された無数の魔力弾丸は真っ直ぐにラピスに向かう。しかしラピスも黙ってはいない。アングウイスを、円を描くように前方へと振るい、次々と魔力弾丸を叩き落としていく。スピードは衰えない。

そしてミーナを射程距離に捉えると、真横にアングウイスで薙払う。ひゅんっ!と、白銀の鞭が空を切り、ミーナを襲う。しかしアングウイスがミーナの体を捉える寸前、彼女は跳躍。

アングウイスは目標を失い、近くにあった木に命中。スカン!と、鞭らしからぬ音がしたかと思うと、木はずりとその半ばからずり落ちて真っ二つにされてしまった。切れ味は抜群のようだ。ミーナは跳躍から地面に着地するまでの間にピースメーカーをラピスに向けて発射する。回避は間に合わないと悟ってか、ラピスはアングウイスで命中弾のみを正確に叩き落としていく。が、叩き落としそこねた一発の魔力弾丸が彼女の腹部を捉えた。

「あううつ…!？」

吹き飛ばされるラピス。しかし命中の直前にミーナにむけて振るつたアングウイスが、右手のピースメーカーを捉えた。

パシンッ！

「きゃあっ!？」

銀のピースメーカーが宙を舞う。どうやら苦し紛れのせい、切断するだけの威力はなかったようだ。

右手を押さえて着地するミーナ。腹部を押さえて立ち上がるラピス。両者の実力は全くの互角である。

ラピスら腹部の痛みに呼吸を乱しながらも余裕を崩さない。

「……やるわね」

「そっちこそ」

腕に走る激痛に表情を歪めながらも、ミーナは不適な笑みを見せる。もしあの時運良く魔力弾丸が命中していなかったら、もしも半歩踏み込まれていたら……。そう思うとゾツとする。

「今度はちょっと本気でいくからね」

ラピスが言う。

「あら、私だって本気の3割くらいしか出してないわよ？」

ミーナも減らず口を叩く。一応それぐらいの余裕は双方にあった。その時、事の成り行きを楽しそうに眺めてたラスリが、ひょこつとラスリの隣に顔を出した。

「うそつけ。お姉ちゃんったら、無理しちゃってえ」

「ち、ちよつとラスリ！邪魔しないで！」

ラスリはラスリの頭を鷲掴みにし、ぐいぐいと後方に押しやった。が、ラスリも負けじと、うにゅー！などと理解不能なかけ声をあげて押し返してくる。

「もう、お姉ちゃんったら。私達は2人そろって初めて本気で戦えるの忘れた？」

「うう……そりゃあそうだけど……」

珍しくラスリに圧され気味のラスリ。ラスリは姉にっこりと笑いかけるとミーナに向き直り、

「と、いうわけだから、ごめんね、ミーナ」

と言って左手首に装備された白銀の盾のような物をミーナに向ける。そしてラスリが目を閉じると一瞬間が光り、そこから無数の白銀の鎖が飛び出す。

これがラスリの武器、『シエーヌ』だ。

この鎖はラスリの意味と魔力に呼应し、長さも数も動きも自由自在の優れものである。白銀の鎖が太陽光を反射し、まるで伝説上の生物のようだ。

確かにラピスのアングUISとの共闘なら2人の戦力は2倍、いや3倍以上だろう。

シェーナから飛び出した鎖は真っ直ぐにミーナへ向かう。

「なっ…！？2人がかりなんて卑怯よ！？」

ミーナは慌てて回避に転じようとする…が、

ずるっ……

「！？っ」

ミーナの足が、着地の際に踏み潰した草の液体にとられた。シェーナがミーナの手足に巻きつき、自由を奪う。

「しまっ……」

「もらったわ！」

いつの間にか至近距離まで接近していたラピスのアングUISが、唸りをあげてミーナを捉えた。

反射的に目をぎゅっと閉じる。

負ける……！

その時、ミーナとラピスの間に人影が割り込んだ。

ズドン……！

「っ！、きゃあぁっ！！」

「にゃあぁっ！？」

衝撃で弾きとばされるラピス。鎖が千切れ、釣り合っていたバランスが崩れて後ろにつんのめるラスリ。

ミーナは啞然としてそれを眺めた。ラスリのシェーヌは千切れた場所から煙のように消えていった。

「……模擬戦……続行」

「シェリル？」

割り込んできた人影は、自分の背たけより巨大な漆黒のハンマーを持ったシェリルだった。彼女はミーナに巻きつく鎖をハンマーで断ち切ると同時に、その衝撃波でラピスも退けていたのだ。

「手伝ってくれるの？」

「……授業」

相変わらずの言葉足らずだが、彼女の言いたい事はわかる。要は授業しろ、ということだ。

「なるほど、ね」

ミーナは苦笑し、落ちていたピースメーカーを拾いあげた。

――

またも戦闘を始める4人。

その光景をオロオロと見つめるアイゼリア。とは言っても、あの4人は本気でやっているように見えて実は手加減しまくりなのだ。もし本気でやっていたら、ラピスはとくに魔法弾丸に貫かれていただろうし、ミーナはシェーナで絞め殺され、ラスリはハンマーで叩き潰され、シェリルはアングウイスでこま切れにされていただろう。一応模擬戦で使う最低ランクの力しか出していなく、これはゲームと同じなのだ。相手が降参するか、寸止めでゲームオーバー。アイゼリアはそれを知っていた。それでも慌てるのは、彼女の心優しい気質である。

と、その時、彼女の背後から呻き声が聞こえてきた。アイゼリアはその場に硬直する。

その呻き声は、確実に近づいていた。ずるっ、ずるっ、と足を引きずる音まで、鮮明に聞こえる。

真夏の、真っ昼間からホラーなこの状況。アイゼリアはこの手の話は苦手であった。

「アイゼリア〜」

「いやああああっ!？」

彼女は普段のおっとりした雰囲気からは想像できないような、神速の裏拳を背後に放った。

手の甲に鈍い衝撃が伝わり、確かに何かを捉えた。

「ぐはっ!？」

「た、隊長!？」

彼女の裏拳をもろに食らったのは、我らがワルキューレ隊隊長、フ

イルデカルド・ライアンバーグだった。フィルはごろごろと地面を転がり、3回転半ひねりを決めてようやく停止した。
アイゼリアは慌ててフィルに駆け寄る。

「あわわ…ごめんなさいっ！」

「だ、大丈夫だアイゼリア。多少脳みそが揺れたが心配ない」

そう言つて治癒魔法をかけようとするアイゼリアの手をやんわりと押しのけ、彼は立ち上がる。

校舎に叩きつけられ、15mの高さから落下したにしてはやけに元気である。

「た、隊長？どこに行くのですか？」

どこから取り出した松葉杖を頼りに、ふらふらと歩きだすフィル。
向かう先には、大喧嘩を続ける4人のワルキューレ達。

「彼女達を止めねば……」

「そんな状態じゃ無理ですっ！」

止めるアイゼリアを押しわけ、フィルは一步一步噛み締めるように歩く。

男には、やらねばならぬ時があるのだ……などと、悲劇のヒーローを演じてみる。

「いつまでやってんのよ、お兄ちゃん」

そんな自分に酔っていたフィルを現実に戻す声の主。木の上か

らフィルの隣にふわりと着地する。

「……エリシア、もう少し登場シーンを考えて……ぐわっ!？」

エリシアに臍を蹴られ、のたうち回る悲劇のヒーロー。そんなフィルをエリシアは踏みつけ、

「なあに気取ってんの。ホントはどこも痛く無いくせに」

と言いながらグリグリとフィルを地面に押し付ける。フィルが少し幸せそうなのは無視しよう。

「しかしだなエリシア、彼女達を止めるのは本気だぞ？」

名残惜しそうにエリシアの足の下から脱出したフィル。今度は真剣な眼差しで彼女を見つめる。

「わかってるよ、お兄ちゃん。でもさすがにあの4人相手じゃお兄ちゃんも分が悪いでしょ？だからね…手伝ったげるよ」

と、天使の笑みでエリシアは言う。かわいいではないか、血の繋がりもない男を慕ういじらしい女の子。

だがフィルは知っていた。その天使の笑みの裏が、悪魔が微笑みであることを。

「……何が望みだ？」

「今夜一晩私と寝る。どお？悪くないでしょ？」

「いいわけないだろ!？」

憤慨して立ち去ろうとするフィル。
しかしエリシアには切り札があった。

「いいの？あの4人、そうとうヒートアップしてるから、下手に刺
激したらまた校舎吹っ飛ばすかもよ？」

「ぐっ……」

フィルは考えた。確かにエリシアの言う通りだ。今の彼女達を相手
にするとしたら校舎どころか自分の命さえ危うい。だからといって
一晩エリシアと過ごせば何が起きるかわからないし、後がこわい。
エリシアの事だ、何かしら罠があるに違いない。いやしかし……。
フィルの頭の回転数は今や最高潮に達していた。この状況で、一番
最適な答えは……………。

「……………今日ただぞ？」

折れた。

「おっけー」じゃあ契約成立ね？」

エリシアはそう言うと、乱戦を続ける4人に向かってフィルと共に
走り出した。

—————

ラスリのシェーナが、シェリルのハンマーを捉えた。同時に両足首
にも巻き付き、自由を奪う。

「やった♪……って、にゃあぁっ!？」

喜ぶのもつかの間、シェリルに鎖を掴まれ、ずるずると引つ張られはじめるラスリ。

「うにゅゅ、力強いゅゅ」

ラスリはシェリルの射程内に入ってしまう前にシェーヌを解除し、距離をとる。

シェリルはというと、油断無くハンマーを構え、射程内に入ると同時に攻撃を加えるつもりようだ。

「ううゅ…お姉ちゃんったらミーナばかり相手にするんだから」

ラスリは恨めしそうにちらりと姉に視線をやる。

依然ラピスはミーナと戦闘中で、こちらに手を貸してくれる余裕は無いようだ。その時、シェリルがラスリに向かって急加速した。その華奢な体のどこにあのハンマーを操る怪力があるのだろうか。成人男性ですら持ち上げれそうにない漆黒のハンマーを軽々と振り上げ、ラスリに向かって振り下ろす。

「にゃあぁっ!？」

ラスリは慌てて後方に跳躍、ハンマーをよける。目標を失ったハンマーは地面を叩き、えぐる。更にはその衝撃で命中地点から半径約5mまでの地面にビビシとビビがはいった。あんなものを食らったらひとたまりもない。

ついでにやたらと無表情なシェリルも、ぶつちやけ恐い。

そのシェリルはハンマーを強引に地面から引き抜くと、さらに追撃をかける。

ハンマーを横薙に一閃。ブンッ！と空を裂く音をたててラスリに迫る。ラスリは慌ててしゃがみこんで一閃を回避。そのままバックステップで距離を取ろうとする。が、シェリルはハンマーを振り切った勢いを利用し、自らの体を強制的に加速。

「げっ」

ラスリはすぐさまそれに気づくが、時すでに遅し。肉迫され、完全にシェリルの射程内。

ハンマーと同じ漆黒の長髪をなびかせながら、シェリルは得物を振り上げた。

ラスリはシェーナで反撃しようとするが、どうあがいてもシェリルのハンマーの方が早い。

「――あちゃー、負けたかな？」

ラスリが半ば諦めかけたその時……。

ガキンッ！

金属と金属のぶつかり合う打撃音。そしてガチガチと擦れ合う摩擦音が後に重なった。

反射的に目をつむっていたラスリは、恐る恐る目を開いてみた。

そこには、いつも見慣れた背中があった。

「……フィル隊長？」

思わず彼の名を口にする。

フィルはシェリルがハンマーを振り下ろす瞬間に2人の間に割り込み、その鉄槌を受け止めていた。

その手には、二対の細身で片刃の剣が握られている。

「おまえ達、止めるんだ！」

フィルはそう叫ぶとシェリルのハンマーを押し返す。

「何もおまえ達まで喧嘩する事はないだろう！？」

ラスリとシェリルを交互に軽く睨みつけるフィル。

「……キマった……」。

「またも自己陶醉するフィル。これでかわいい教え子達は『私が間違ってた！一生涯についていきます、フィル隊長！』とか言ってる俺を慕うに違いない。完璧だ。」

「思わずにやけそうになる口元に喝を入れ、きりりと一文字にむすぶ。しかし次の瞬間にはその凛々しい口元はあんぐりと空けられたままになる。」

「隊長………参戦」

「あ、隊長もするですかあ？」

「……へ？」

「シェリルとラスリの思いがけない言葉に、気の抜けた疑問形を返すフィル。」

「その疑問形を参戦と解釈した2人は、あろうことかそれぞれの得物を構え直す。」

「あゝ……君達、何かとんでもない勘違いを……」

「大丈夫ですよ、隊長♪手加減はしてあげます」

「……………攻撃目標……………変更」

ラスリのシェーナとシェリルのハンマーが、一斉にフィルを襲った。

「ぎゃああああっ!?!」

ああ…短い人生だったな…………。

フィルの脳裏に、走馬灯が現れては消えた。

シェーナが体を締めつけ、唸るハンマーが彼を捉えようとしたその時。

キーン!キーン!

何者かによってシェーナが断ち切られ、同時にハンマーの射程からフィルを押し出した。

「うおっ!?!」

そのまま地面を転がるフィル。慌てて起き上がろうとするがすぐに頭を踏みつけられ、突っ伏した体勢に戻された。

「何やってんのお兄ちゃん」

「エ、エリシア…………?」

そう、フィルを窮地から救ったのはエリシアだった。彼女の手にはナックル付きのコンバットナイフが握られている。

「まったく…お兄ちゃんはエリシアがいなくな〜んにもできないんだから。どお？少しはエリシアのありがたみがわかった？」

小悪魔的な笑みを浮かべ、更にグリグリとファイルを踏みつける。そして今度はラスリとシェリルにびしっ指を突きつけながら、

「お兄ちゃんには指一本触れさせないんだから！」

などと堂々たる宣言をする。矛盾の塊である。

すると、彼女の体を空気の渦が被った。最初はつむじ風程度だったそれは次第に勢いを増し、周囲に突風を巻き起こす。

「いくわよ？」

突風を纏い、エリシアの華奢な体が一気に加速した。

—————

魔力弾丸がラピスをかすめ、アングウイスがミーナの服の裾を引き裂いた。互いに一步も譲らない2人。

周囲の状況は惨々たるもので、木々はなぎ倒され噴水は粉々に粉砕されていた。

ミーナとラピスは互いに動きを止め、自分の最適な間合いをはかっている。ミーナは魔力弾丸が100%命中する距離を、ラピスはアングウイスで捉える事ができるギリギリの距離を、数ミリ単位でじりじりと狭めていく。

あと数センチ…あと数ミリ。息詰まる緊迫感の中、2人は同時に自分の間合いに——入った。

ラピスはアングウイスを振り上げ、ミーナはトリガーの指に力を込める。――が、野暮な事に2人を邪魔する人影が間合いの中心に転がり込む。

『た、隊長？』

ラピスとミーナの声がハモる。そこにはフィルがぐるぐるを目に貼りつけて横たわっていた。

「いてて……」

後頭部を撫でながらむっくりと起き上がるとするフィル。しかし、

「きゃあああつ！？」

吹き飛ばされてきたもう1つの人影がフィルを直撃。2人はゴロゴロと地面を転がり、フィルの最初の落下地点から数メートル離れた所でようやく停止した。

「うきゅん…あれ、隊長？私の下で何やってるんですかあ？」

2人目の人影はラスリであった。幸いにもフィルがクッションとなり怪我はしていないようだ。しかしクッションの方は……。

口から何やら魂らしき物体がふよふよと漂い、白目をむいてピクピクと痙攣している。

ラスリはそんなフィルをじーっと見つめた後、近くでオロオロとするアイゼリアに視線を移し、一言。

「アイゼリア。隊長が死んじやいました」

……誰のせいでこうなったと思っているのだろうか。
呼ばれたアイゼリアは慌ててフィルに駆け寄り、治癒魔法をかけ始めた。

そんな様子を呆然と見ていたラピスとミーナ。
しかしふと我に返り、慌てて戦闘体勢を取り直す。

「ちょっと邪魔が入ったけど、次で決めるからね」

と、ラピス。ミーナは不適な笑みを浮かべ、応える。

「のぞむところよ」

2人は再び間合いを詰め始める。
が……

ゴオッ！！

2人めがけて木が丸々1本吹き飛ばされてきた。
それなりに重量があるにも関わらず、まるでペンを転がすかのよう
に軽々である。

『きゃあっ！？』

慌てて後方に回避するラピスとミーナ。
すると木と同時にだれ込んでくる2人の人影。

「お兄ちゃん私のモノよ！」

「……………」

疾風を纏ったエリシアと、ハンマーを振るうシェリルである。シェリルがエリシアに向かってハンマーを振り下ろすと、エリシアが纏った風に阻まれて逆に吹き飛ばされる。そして吹き飛ばされたシェリルにエリシアは纏った風を利用して一気に加速。接近戦に持ち込もうとするが、体勢を立て直したシェリルが振るったハンマーに阻まれる。この繰り返しだ。しかしこの繰り返しが続くが周囲に与えるダメージは凄まじい。振り下ろしたハンマーをエリシアが避ける。するとハンマーは地面を叩き割り、地割れを起こす。

「いやあゝ!？」

地面の裂け目から逃げ惑うラピス。

エリシアが加速すると周囲に突風が吹き荒れ、木々をなぎ倒し吹き飛ばす。

「きゃあああっ!？」

迫り来る丸太から潰されまいと逃げるミーナ。

しかしそんな事お構いなしに戦闘を続けるシェリルとエリシア。

ニールング学園の美しい庭園は、今や悲惨な戦場と化していた。

落ちかけた地面の裂け目から這々の体で這い上がったきたラピス。潰されかけた丸太をようやく魔法弾丸で全て吹き飛ばしたミーナ。

互いに離れた場所だったが、行動と口にした言葉は同じだ。顔を伏せてプルプルと震え、そして……。

『上等じゃない……………みんなまとめて相手になってあげるわ!!』

2人は同時に走りだし、同時にピースメーカーとアングUISを振るった。

――これが、リーバス達が到着する2分前までの出来事である。

――

リーバスとクライブは啞然として目の前の光景を見つめていた。

なぎ倒された木々、原型を留めない噴水、ひび割れた地面などなど。リーバスの人生の中でこれほどまでに荒れた大地を見るのは、戦場以外では初めてである。

しかしリーバス達を驚愕させるのはこの荒れた大地などではない。気を失い、アイゼリアの膝枕で呑気に呆けているフィル。

「リーバス大佐あゝ……………どうです我がワルキューレ隊は……………素晴らしいでしょあゝ……………」

などと寝言まで言う始末。ワルキューレ隊うんぬんよりも、まず彼をなんとかした方がよい。

そしてフィルに枕にされているアイゼリアはと言うと、どうやらリーバス達に気づいたらしくオロオロとし始める。行動を起こしたくてもできないのだ、フィルのせいで。彼女の心優しい性格があだとなった。

次にラスリ、エリシア、シェリルの3人だが、彼女達は皆同じ状態だった。服はボロボロ、顔は泥だらけで、3人とも一カ所に積み上げられて目を回している（シェリルだけは無表情で気を失っているのかどうかよくわからない）。

そして最後にラスリ達3人を踏みつけて高笑いしている2人。そう、ラピスとミーナだ。この2人も同様にボロボロの泥だらけだったが、ラピスはラスリ達を踏みつけたまま、

「女王様と呼び!!」

と決めゼリフを言い放つ。ミーナも同じポーズで、

「私に勝とうなんて百年早いのよ!!」

と、こちらも決めゼリフ。
そしてしめは2人同時に、

『オーホッホッホッ!!』

と高笑い。元の原因はこの2人だというのに、いい気なものである。
リーバスは啞然としながらクライブに問うた。

「……これがワルキューレ隊かね？」

「……そのようです」

さすがのクライブもこの光景には驚きを隠しきれず、ポーカークフェイスが崩れる。それもそうだ、あれだけ気にかけていたワルキューレ隊がこれでは、リーバスの落胆も大きいだろう。クライブはリーバスの顔色を確かめるため、ちらりと横目で彼を見た。

「……ふふふ……はぁーっはっはっ!!」

リーバスは笑っていた。それも、楽しそうに。

「いいではないか、ワルキューレ隊！やはり伝説の戦乙女はこうでなければな！！」

啞然とするクライブをよそに、リーバスは依然氣を失ったままのフイルに歩み寄った。

「ワルキューレ隊の成長、確かに見せてもらったぞ？」

何かを察したのか、フイルはううんと苦しそうに唸る。リーバスは楽しそうな笑みを浮かべると、きびすを返して来た道を戻り始めた。クライブも慌ててそれに続く。

「よいのですか？大佐」

色々な意味を込めてクライブはリーバスに問うた。するとリーバスはにやりと笑い、

「いいのだよ、クライブ小佐」

と言う。

（ワルキューレ隊……これからまだまだ成長するだろう。楽しみではないか）

リーバスはにやにやしながらニールベルグ学園を後にした。数ヶ月後に見られる、成長したワルキューレ隊の姿を思い描きながら。

――――

ようやく目を覚ましたフィルが見たのは、原型を留めないニーベルング学園の庭園と、ワルキューレ隊の面々だった。

いつの間に参加したのか、ラスリまでエリシア達と一緒に目を回している。

「……私が気を失っている間に……何が起こったんだ……？」

高笑いしているラピスとミーナを呆然と見つめ、そう呟く。すると、先ほどまで枕にされていたアイゼリアがおずおずと口を開く。

「あ……あの、隊長？実はその……たった今リーバス大佐が……」

そこまで言いかけた時、突然フィルが振り返ってアイゼリアの肩を掴んで揺さぶり始めた。

「アイゼリア！！今何と！？リーバス大佐がどうかしたのか！？」

フィルの剣幕に多少怯えの表情を浮かべながら、彼女は恐る恐るその後を口にした。

「え、えっと……隊長が気絶してる間にリーバス大佐がいらっしやって、視察していききました……」

アイゼリアが言葉を終えると、肩を掴んだフィルの手から力が抜け、彼はへなへなとその場に座り込む。そして何やらブツブツと呟き始めた。

「……はは……終わりだ……リーバス大佐が……見られた」

端からみると頭が沸いたとしか思えない。今にも口の端から涎を垂らし、『僕は神様なんだ』とか言いかねなかった。それだけは避けねばならない。アイゼリアは意を決してそんなフィルに話しかけた。

「で、でも隊長。リーバス大佐は笑ってましたよ？隊長の所に来て、『ワルキューレ隊の成長は見させてもらった』って言っていました……」

その言葉を聞いた瞬間、虚ろだったフィルの瞳に活気が戻った。くわっと目を見開き、勢い良く立ち上がる。

「そうか……！リーバス大佐はそう言ったのか……！やはり私は間違っていないかったのだ……！」

腰に手を当て、はっはっはと高笑いするフィル。根本的に間違っているような気もするが、とりあえず最悪の事態は免れたので、アイゼリアは良しとする事にした。

「……でも、何か大切な事を忘れてるような気が……」

アイゼリアの呟きは、もはや有頂天のフィルには届かない。

2日後、フィルに記念すべき51回目の営倉入りの命が下されたのは言うまでもない。

episode : 2 共振・前編

ニーベルング学園の内部は、白を基調とし、色彩に富んだ造りとなっている。幅の広い廊下が連なる部屋を繋げる役割を果たし、高みにある天井は空間的な余裕を感じさせてくれる。そこを歩いていくのはフィルだ。

一挙手一投足にある種の機械のような機敏さがある。また威厳があり、どこか高圧感を漂わす。とても営倉入りの常連とは思えない。擦れ違う人々は彼に敬礼し、その背中を見届ける。誰もが憧れの視線を持って。

前方から来た男性士官の一団も敬礼し、例に倣ってフィルを見届け、

「くそー、羨ましいな。『あの』クラスの指揮官なんて……」

「軍曹……。あのハーレム男をやっちゃいましたよ」

「落ち着け。あの男は優秀な軍人で、皆から一目置かれている素晴らしい士官だ。そんなこと……やるなら戦場で」

「名誉の殉職ってやつですか」

やはり憧れの念を抱く。色んな意味で。

フィルはそんな熱烈な敬意も気に掛けず、廊下を闊歩していく。目指すはワルキューレ隊の寮だ。

用事というと、

（今日は個人に言い聞かせておかねば……）

ワルキューレ隊の面子は、少々、落ち着きが無い。飾つて言えば、とても勇健で活発な部下たちだ。しかし困ったことに、釣り合うだけの清楚な部分がない。有り体に、しとやかではないのだ。

元来、ワルキューレ隊というのは、戦場以外では女神と讃えられる存在だ。自身等もそれを自覚し、節度ある行動をしなければならぬ。

だと言うのに。

フィルは立ち止まり、腕を組み、眉間に人差し指を当てた。理想像と比較すると頭痛がしてくるのだ。

強靱な精神力で耐えてから、また歩を進める。

とにかく今日こそはワルキューレ隊の何たるかを語り通す。

フィルは決意を胸に秘め、寮棟の区域へと足を踏み入れた。

同時刻。

個人の部屋に一人の少女がいた。ベッドに腰を下ろし、暇を持て余しているように見える。

正面にあるのは、足に車輪の付いた移動可能な鏡。赤毛の少女

——エリシアは頻りに髪型を変え、笑顔を作る。

やがてそれも飽きたのか、ベッドに寝転がり両足をジタバタさせる。三十秒ほど繰り返し返してから停止。

「ひま」

天井に向かって間延びした声を出すと、溜息を吐いた。ややあってから起き上がる。その表情は決然としていた。

「お兄ちゃんとデートしよ」

クローゼットの前まで行き、引き戸を開ける。中にはドレスのよ

うなフリルだらけな服が大半を占めていた。

大人っぽく、などと簡潔な理由から黒を選び、

「これでお兄ちゃんを虜にするんだから」

既に彼女には見えていた。自分の美しさに惚れたフィルに即日プロポーズで、幸せ街道をまっしぐらな未来が。

デートの予定まで決まっている。フィルの都合などは考慮されない。

シャツとスカートを脱ぎ、肢体を鏡に映す。

「ああ、なんて罪な身体なの」

いい感じに自己満足するのもそこそこに、着替えようとした。

その時――

なんの前触れも無く、物凄い勢いでドアが開かれた。

エリシアは驚き、服で身体を隠しながらそちらに目を向けている。ノックも無しに闖入してきたのは男。それもエリシアがよく見知った人物。フィルだ。

彼は入って来るなり、真一文字に結んだ口を解く。

「エリシア。突然だが、大事な話がある」

本当に突然だ。相手の都合を考慮しないバトルなら、ぶつちぎりの優勝である。エリシアなど及びも付かないだろう。

エリシアは身をわなわなと震わせ、

「お兄ちゃん……、この格好が見えないの？」

問われ、フィルが真剣な視線を前方へと注ぐ。ふむ、と唸ってか

ら、軽く頷き、答えを出す。自信たっぷりな口調で。

「間違いなく、着替えの途中だな」

「解ってるなら後ろ向いて……」

「今はそんなことよりも優先度の高い事項があるんだ。そのまま聞いてくれ」

エリシアは全力で馬鹿を張り倒した。甘美な妄想などは、もうどこかに飛んで行ってしまった。

急いで着替え終わると、同時にフィルが復活。

「痛いではないか、エリシア。まともな話している時くらいは真面目に聞かないか」

「脳の構造がまともになってから言つてよ」

フィルは腕を組み、少し黙考してから、

「私は下士官時代、頭脳明晰と誉められていたが？」

「状況把握能力を鍛えてよ。お願いだから」

「馬鹿な……。指揮能力では、私の右に出る者はいなかったぞ？」

「変人っぷりもね！」

「エリシア……。そこまではつきり言われると傷付いてしまう。もっとモラルを大切にしまえ」

「後半はこっちの台詞！」

そんな遣り取りが虚しくなったのか、エリシアは溜息を吐く。
その様子を見て、フィルは確信していた。

（やはりワルキューレ隊としての自覚が足りていないか……）

フィルは真剣な表情でエリシアの両肩に手を乗せる。瞳を重ね、
エリシア、と重みある語調。

まずは素行と服飾を正さなくてはならなとい。つまりは他人への
突発性の暴力と、この機能的な要素のかけらも無いヒラヒラしたド
レスだ。

だが暴力は現行で叱らねば意味はない。ならば、残るは、あと一
つ。

「休日だからと言って、そんな服装は駄目だ。制服に着替えるんだ」

言い終わった直後、フィルは顎に一撃を貰い、床に倒れた。
怒り心頭となったエリシアは、部屋から出ていく。沈黙。

フィルは思う。

私は何か間違っただろうか、と。

しかし、そこにすぐさま別の考えが割り込む。そんなことはない、
と。

なぜなら、

……そうか。反抗期だな。エリシアも年頃だ。無理もない。うむ、
そうか。なるほど。

倒れながら腕を組み、ひとりごちに納得した。

立ち上がり、乱れた制服を直すと、エリシアが立ち去ったドアを
注視する。

そこまで行き、踵を返してから、

「待っているぞ、エリシア。君が私の話に耳を傾けてくれる、その日を……」

部屋に思いを残すように言った。そんな日は永遠にないと、いい加減に気付けないものか。

フィルはドアを閉めると、次の部屋へと向かった。

フィルが目指したのは同じ階層にある部屋。そこはラピスの個室である。ついでに、そのすぐ隣がラスリの個室となっている。

フィルはいきなりドアを開く。この男に学習能力の無いことが露呈した。

部屋に入ると、ラピスが椅子から立ち上がるうとする体勢で、フィルを凝視していた。

「ふい、フィル隊長！？ な、なんですか？ いきなり……」

「少し話したいことがある」

「とりあえず人の部屋に入る時はノックくらいしてください」

「なに……？ まさか君も反抗期なのか？」

言うなり難しい顔をして考え込むフィル。

ラピスは、フィル特有の変な回路が作動しない内に、頭を左右に振った。

「違いますよ。——それで話って何ですか？」

フィルは引き締まった相好を、より一層、厳しいものとした。

「ああ。そうだった。ラピス…… 今後はワルキューレ隊として、節度ある行動をするように弁えてくれ」

聞いた瞬間、ラピスが表情に陰を持たせた。

「な、なぜですか？ なぜ——」

「勿論、これは君だけでなく、他の皆にも言えることだ」

喰って掛かろうとしたラピスの言葉を遮り、フィルは厳然と告げた。

それでも納得いかないのか、ラピスは不満だと訴える。言葉ではなく表情によって。

やがて、

「私ではなく、一番に伝えるべき者がいると思いますけど……」

彼女が言うのは、ラスリのことである。確かにラスリは群を抜いて自覚が足りていない。ある意味、スペシャリストなくらいだ。

「ラスリにはこのあとと言っておく。だが、君にも心に留めて貰いたい事だ。特にミーナとの揉め事は避けてくれ」

軽く頷いてから、淡々と言う。

ラピスは急いで口を開こうとして、止めた。そして首肯する。

本当はミーナの問題を色々指摘したいのだろうが、この場合は自重したらしい。

一方のフィルも、ラピスの言いたいことなど解っていた。理解した上で、敢えて例として挙げたのだ。もしも彼女がミーナに責任を押し付けたなら、それは改心させなくてはならなかった。

しかしフィルは、こうも思っていた。ラピスはそのようなことをする娘ではない、と。

我が儘だが、自らの落ち度も認められる人間だ。そう評価している。

フィルはふと頭上を仰ぐ。

空が見えた。白の存在を許さない、青一色の空。

この部屋には天井が無かった。代わりに質力の弱い魔障壁が張ってある。簡易だが、雨程度なら防げる代物だ。

ラピスも空を見ると、溜息しかない様子。

「そうは言っても……」

視線は上空に向けたまま、フィル。続けて、

「ラスリには厳しく注意しないとな」

ラピスは同意から頷きを幾度が見せた。

フィルは視線を正面に戻す。

「今から注意しに行くが、後で君からも言っておいてくれ。姉の言葉もあるならラスリも当分の間は静かになる筈だ」

「じゃあ、ラピス・バーストを一発」

「君たちの話し合いは足を使うのか？ 変わっているな」

「はい。それで大抵のことは解決しますから」

笑顔で言うラピス。腕を組んだフィルは、至って真面目に、

「ふむ。ならばそうしてくれ」

踵を返し、部屋を出る。隣の部屋のドアを見つめ、一息。

（おそらく彼女が最も苦勞するな……）

そんなことを思いながら、ドアノブに手を掛けた。開けようとして、内部から引っ掛かる。鍵が掛かっているようだ。

フィルはドアに耳を当てた。こうすると音を聞き分け、内部の気配を探ることができる。

どうやら、いるようだ。

「よし」

軍服の内側に手を入れ、マスター・キーを取り出すと、鍵穴に差し込み、それを回す。微小な音がし、鍵が外れた。

この一連の動作。まるで我が家であるかのように流麗だった。ドアを開ける。

そこで飛んできた矢と、地面から突き出した槍を避けてから、中へ。

今のは対客人兵器『もてなし君』である。罨は数十のパターンがあり、死なない程度に加減されている。フィルも最初は油断から血を見ることになったが、二度目からは引っ掛からなくなった。

ワルキューレ隊のメンバーからは、危ないから外してくれ、と文句が出ている。だがフィルは意外と気に入ってたりするのだ。この前など、用もないのに何度も開けて訓練の変わりにしていた。

それはさておき。

ラスリは何やら怪しい薬品類を調合している最中だった。

「ラスリ。話があるので聞いて貰いたい」

近くまで寄ったフィルは声を掛ける。

ラスリは無反応。作業に没頭していて、耳に届かなくなっていた。仕方がないので、緑色の液体が入った硝子瓶をラスリから奪う。

あ、とラスリは声を出し、フィルの存在に気付く。向いた瞳に視線を合わせ、中身を覗きながら話を切り出した。

「こういつた発明は、なるべく控えてくれないか？」

「えー、どうして？ 隊長のいじわるう」

頬を膨らませるラスリ。

「いじわるなどという問題ではない。君の発明は、ここニールング学園では役に立たないことが多い」 言い切ると、ラスリは机の引き出しから金属でできた黒い球を見せる。

それはなんだ、とフィルが聞こうとした直前、ラスリは自慢げに説明を始める。

「これは隊長が営倉入りした時に、暇を潰せる道具で、跳ねたり、回ったりするんだよ」

前半部の主な原因となる者がこれである。それでもフィルは努めて冷静に次の言葉を選んだ。

「営倉は反省をする場所だ。そんなもので遊んでいたら私のクビが飛ぶ」

「えー！ クビチョンパになっちゃうの!？」

「いや……、そういうことでは……」

目を見開いて驚くラスリ。少ししてから、うーん、と考える仕草を見せ、

「でもー、きっと首がなくても平気だよ。だって隊長だもん」

「君とは更に話し合う必要ができたな」

「あとねー、隊長」

「何だ？」

「持つてる薬品は丁寧に扱ってね？」

「なぜだ？ この部屋が吹き飛ぶ程の爆発物なのか？」 ラスリは安堵させるように笑みを作り、否定の意を示す。

「プレア王国が無くなるくらい」

フィルの体中から、一瞬にして汗が吹き出した。自然と震えてくる。自慢の精神力が全く役に立たない。こんなに恐怖は地域紛争の初陣で敵に囲まれた時以来だ。

慎重に慎重を重ね、ようやく硝子瓶を置いてから、一息。

「そんな危険物を何と混ぜようとしていたんだ、君は……」

その質問には答えず、ラスリは液体を他の瓶の液体と混ぜてから呟いた。

「あ……、量を間違えちゃった……」

刹那。フィルは咄嗟の判断で身を横に跳躍させる。ゴキブリ並の速さでベッドの下に潜り込み、耳を塞ぐ。

爆発——はしなかった。数秒すると、隣の部屋からラピスがやってきた。

「ラスリ。あんた今、爆発を起こす寸前のミスしたでしょ？」

「すごい！　なんで解ったの？　テレパシー？」

「嫌でもするどくなるのよ。お蔭さまでね」

「わあーい、お姉ちゃんに感謝されたあ」

「してないわよ！」

頭を叩かれ、あう、と唸ったラスリは、頭を摩りながら、

「あれえ？　隊長？」

呼ばれたゴキブリ男はベッドの下から這って出てきた。

我が身可愛さな男に半目を向けるラピス。フィルはそれを無視し、直立の姿勢に戻る。

「とにかく、今後はせめて実験だけでも控えるんだ。いいな？」

取り敢えず締めに入った。

渋ろうとするラスリを、ラピスが睨み付ける。さすがのラスリも姉には弱いのか、やがて承諾した。

名残惜しそうに手にした液体をじいーっと見る。次に上目遣いでフィルとラピスを見てから、

「この実験だけは、最後までいい？」

「いいわけないでしょ！」

再び、頭を叩くツッコミ。

するとその拍子に、緑色の液体が他の瓶へドバドバと注がれいく。フィルとラピスは恐怖で顔を歪ませる。

直後、ラスリの部屋が大爆発した。

いやあ、たまげたたまげた。ウチの頭がダイヤモンド並みに硬い頭領をやつと騙くらかして、ようやく愛しのスイートマイハニーの愛妻弁当食おうとホップステップジャンプってな時にだ、唯一無事だった生徒さん達の寮棟がいきなり爆発したんでさあ。

ありやテロですよ、ダンナ！あそこの生徒さん達はみんなウチのスイートマイエンジェルくらいの歳の娘っ子ばかりだ。それなのに、あそこの隊長さんはそんないたいけな娘っ子を戦場に引っぱり出そうとしてやがんだ。恨みかってもおかしかねえでさあ。ま、俺あウチのスイートマイエンジェルを戦場に連れてこうなんざぬかす奴あ、伝家の宝刀『頭領からもらった鉋^{かん}』で一寸刻みにしてやらあ。

（ニーベルング学園の改修にあたっていた大工の話）

—————

茶褐色という不気味この上ない煙をあげるニーベルング学園の一室。外に面した壁が根こそぎ吹き飛ばされ、気持ちのいい晴天がパノラマで拝めるという素晴らしい部屋に変貌していた。もちろん、雨風はしのげない。

部屋の内部はもつと素晴らしい事になっていた。散乱した実験器具、反転したベッド、壁に突き刺さったドレッサーなどなど。抽象芸術家真つ青の超個性的オブジェの部屋がそこにあった。

そんな中でも一際目を引くのが部屋のほぼ中央に居座る銀色の球体。よく見るとそれは、無数の銀色の鎖の集合体である事がわかる。所

々焦げてはいるがほとんど損傷は無く、銀の巨体をその場に存在させている。

チャラツ、という音と共に鎖の1つが球面から離れた。次の瞬間には全ての鎖がまるで蛇のように蠢き始め、球体の中心にいた少女の左手首の小さな盾へと収まってゆく。

全ての鎖が収まった後、少女は隣で耳を塞いでうずくまる自分とうりふたつの少女に笑いかけた。

「危なかったね、お姉ちゃん」

鎖少女「ーもとい、ラスリ・ヘーミニスは、爆発の瞬間に自分の得物であるシェーヌから無数の鎖を展開させ自分と姉の周囲を取り囲み、爆発から身を守ったのであった。

話しかけられた姉「ーラス・ヘーミニスは耳を塞いだままうっすらと目を開き、周囲の状況と自分の体がまだ存在している事を確認する。そして神速の速さで立ち上がり、その勢いを利用した垂直踵落とし、通称ラピスバーストをラスリの脳天めがけて放った。

直撃。

うずくまって悶絶するラスリにラピスは声を荒げた。

「あんたバカでしょ？ねえ、バカでしょ？」

ラピスに詰め寄られ、ラスリはあうう、と悲痛な声を出しながら後ずさる。

「普通学校にこんな危ない物持ち込む人間いる？ましてや混ぜただけで手榴弾顔負けの爆発起こす液体で実験するなんて……」

「あ、それなら大丈夫！あれでも本当の威力の3分の1も出てないから。隣の赤いやつと混ぜたってたら危なかったけど……」

本日二度目のラピスバーストが炸裂した。
ラスリの言う隣の赤い液体に混ざっていたらどうなっていたか……
想像もしたくない。

「あれ…そう言えば隊長は？」

驚異的再生力で復活したラスリが、まだ痛む頭をさすりながら呟いた。そういえば爆発の後からフィルの姿が見えない。ラピスは戦慄した。

「ラスリ！なんで隊長も一緒に守らなかったの！？」

ラピスに問い詰められ、ラスリはしばらく考えた後、首を傾けて頭をコツンと叩き、舌を出しながらはにかんだような笑みで……。

「忘れちゃった」

と可愛く言う。

ラピスの踵が、血を求めて振り上げられた。

――――

フィルは生きていた。一瞬、あの世の入り口であろうお花畑と川が見えたが、奇跡的に無傷であった。

とはいえ、爆発の衝撃で部屋の扉を突き破り、向かいの部屋の壁に逆さまでめり込んでいた……それでも、彼は無傷だった。

流星はゴキブリの化身、身のこなしだけでなく生命力までゴキブリ並みである。

「ふむ……」

逆さまのまま腕組みをしながら何かを考えるフィル。端から見るとこの上なく滑稽だが、彼自身はいたって真面目。だからこそたちが悪い。

「やはり彼女からは実験を取り上げるべきか……いや待てよ、部屋を隔離して四方を鉄板で覆うとか……」

ひとしきり独り言に勤しんだ後、フィルは壁から抜け出す。

（やはりラスリとは一度じっくり時間をかけて話し合う必要があるな……）

一人で納得し、頻りに頷いた後、フィルはその場を後にした。壁には人の形のへこみがくつきりと残っていた。

—————

少女は体を清めていた。今から触れる物に、汚れた体で触る事は許されないような気がしたのだ。

シャワーからでる心地よい水の感触を十分楽しんだ後、少女は裸体にタオルを巻きつけ、バスルームを出る。服なんか着る暇は無い。

一刻も早くそれに触れたかったから……。

ミーナ・N・ヴァンシュタインは、この瞬間を待ち望んでいた。

おこずかいと称された支給金を爪に火を灯す思いで貯めに貯め続けた。そして今、そのおこずかいを使ってようやく手に入れたそれは、鈍い金属光沢を放ちながらベッドの上に横たわっている。まるで、ミーナの手に収まるためにここにあるかのように……。

ミーナなそれを手に取り、そつと頬を寄せた。

「ああ…私のM139…」

円形に列んだ多数の銃口、ずんぐりとした胴体。そう、それは見間違いなく、人間が使用可能なサイズのガトリングガンであった。ノーマル使用とは異なり、バレルが長めにカスタムされた特別仕様である。

「はうう…やっぱいいわ…。この重量感、このオイル臭……どれを取っても最高級！」

悦に入り、ほんのり朱に染まった頬をその鉄の塊へと擦り付ける。バスタオル一枚の少女がまるで恋人に愛を囁くようにガトリングガンに体を寄せる。もしこの光景を5文字以内にまとめよという問題があつたなら、『違和感』で正解間違い無しだろう。

とその時、ミーナの部屋を扉が勢いよく開き、あのゴキブリ男がずかずかと入室してきた。

「いきなりですまないが失礼するぞ。実はミーナ、君に話しが…
…何をしているんだね？」

ガトリングガンを抱きしめたまま固まるミーナ、それを無表情で見つめるフィル。5文字以内で表すなら『滑稽』で間違い無し。

「……………百歩譲っていきなり入ってきた事は許しますよ？いつもの事ですし。でも…………隊長は私の格好見てどうするべきかわかりませんか？」

小刻みに震えるミーナ。大噴火の前には小規模な地震が多発するも

のだ。しかしフィルのこの後の行動によっては大噴火を阻止できるチャンスがあつたのだが……。

「……ふむ、私の事は気にしないでいい。そのまま聞いてくれれば何も言わない。なんならその武器と愛を語り合つたままでも……」

ブチッ

確かに、聞こえた。何か紐状の物が千切れるような音が……。ミーナは無言で立ち上がり、抱きかかえたガトリングガンを構え直す。

「ん？ミーナ、一体何を……」

簡単な整備を済ませ、銃口をフィルに向ける

「ミーナ、冗談でも上官に銃口など向けるものでは……」

駆動音と共に回転を始めるバレル。ちなみに……実弾装備。

「ま、待て……話せばわか……」

ミーナの指に力がこもり、トリガーを……引いた。

ドガガガガガガ！！

横殴りの雨のように襲い来る弾丸の嵐。フィルはそれを持ち前のゴキーマとい身のこなしの速さで回避する。ミーナは負けじと追撃。フィルが通った後は壁も床も、何もかもが蜂の巣にされていった。一瞬の隙を突き、フィルはバスルームに逃げ込んだ。急いで鍵をか

ける。

ふう、と汗を拭うフィル。これでとりあえず蜂の巣はないだろうと、ホツと胸をなで下ろしたローが、甘かった。

ミーナはM139をに投げ捨てローずにそつとベッドに置くと、部屋壁に飾ってあったWinchester M1897「ウィンチェスター」というクラシカルなショットガンを手に取る。そしてどこから取り出したかは神のみぞ知るショットシェルを詰め込み、ポンプ。ジャコ、という音と共にシェルが装填された。

「死にさらせー！！」

ミーナはウィンチェスターをフィルのいるバスルームの壁に向かってぶつ放した。至近距離で放たれた散弾は壁を突き破り、フィルを襲う。

ダウン！！ダウン！！

ニールング学園にショットガンの銃声が数分にわたってこだました。

—————

「ローで？何の用ですか、隊長」

背もたれが穴だらけの椅子に脚を組んで腰掛けるミーナ。今はタオル一枚ではなく普段着である白のワンピースの着用に至ってた。

肩にウィンチェスターを担ぎ、発する言葉の一つ一つが殺気を放っている。

フィルはと言うと、失われた威厳を取り戻すかのごとく直立し、精一杯の威厳を漂わせるべくネクタイを直している。服の所々に銃痕

らしき穴が空いているが、なぜ無傷なのかは神ならぬフィルのみぞ知る所である。

「実はだな、ミーナ。ー今後、ワルキューレ隊の規律を乱すような行為は控えてほしい。特にラピスとの仲の改善に努めてもらいたい」

フィルが言い終わるとミーナの表情が曇った。理由はわかる。

ミーナはワルキューレ隊の中でも成績はトップクラスで、試験ではいつもラピスと2位を争っている。ちなみに1位はいつもアイゼリアだったりする。

そんな自分が、なぜこのような注意を受けねばならぬのか。高いプライドと自らの絶対の自信を持つミーナにとって、これは屈辱以外になり得ないのだ。

フィルはその事を嫌と言うほどよく知っていたので、最後に言葉を付け足した。

「もちろん、これは君以外のワルキューレ隊達にも言える事だ。ラピスにもよく言い聞かせておいた。君の方からもしできる限り歩み寄ってみてはどうだね？」

「……喧嘩をふっかけてくるのはあっちです」

「だが君も同じ頻度で宣戦布告するだろう？」

フィルの鋭い指摘にうう…と呻き、返す言葉を失うミーナ。だがフィルはそれ以上言葉を紡ぐとはしなかった。

彼女はプライドが高く自信過剰ではあるが、人の言う事は素直に受け止める事ができる子だ。確かに先ほどの責任転換は悪い事ではあったがすぐに自らの非を認め、反省の意志を見せた。

同じ間違いは二度としない。それがミーナのバイブルなのだから。

「では頼んだぞ、ミーナ」

フィルはきびすを返し、蜂の巣となったミーナの部屋を後にしようとドアノブに手をかけた。

「そうそう、武器へと過度な愛情は戦場において誤った判断を招きやすい。その所もよく気をつけて……」

「出てけー！ー！ー！」

ミーナ・トルネードが炸裂した。

――――

痛む脇腹をさすりつつ、フィルは次のワルキューレの元へと向かった。ある意味、彼女が一番手強いかもしれない。

寮煉の一番端にある扉。他の少女たちは入り口に自らの名前を彫った真鍮のプレートや、自分好みの飾りつけを扉に施していたりするのだが、彼女だけは違った。

ネームプレートも飾りつけも一切無い、純正の扉そのままの部屋。案の定学習しないフィルはノックも確認もせずに扉を勢いよく開いた。

「いきなりで悪いが失礼するぞ、シェリル」

ずかずかと我が物顔に入室するフィル。相手も軍人とはいえ女性である。フィルには彼女達のプライバシーを守ってもらいたいが、おそらく彼の辞書にプライバシーという単語は存在しないのだろう。

「た、隊長？どうしたんですか、急に……？」

部屋には先客がいた。藍色の長髪、おっとりした癒し系の顔つき、ワルキューレ隊一の見事なプロポーション。アイゼリア・エンシェロールである。

彼女は椅子にちょこんと腰掛けるシェリルの黒髪を、持参のヘアブラシでとかしている最中だった。

「アイゼリアも一緒か。丁度いい、シェリルの次は君にも話があったのだ。二人で聞いてくれたまえ」

シェリルは無言、無表情でフィルを見上げる。とかされた漆黒の長髪がさらさらと肩からこぼれ落ちた。

「シェリル、君はもう少し仲間達と交流を持った方がいい。それが周囲のためのみならず君のためにもなる」

フィルはシェリルがニールベルグ学園に来た当初からこの事を気にかけていた。

他のワルキューレ達と必要最低限の交流しか持とうとせず、暇さえあれば一人読者に勤しむ。その所為か、近寄りがたい存在として周りからは敬遠されていた。今だからこそこうして仲間達から気にかけてもらっているが、学園を卒業して他の部隊と一緒に行動するようになった時、初対面の人間と上手くコミュニケーションがとれるかどうかとフィルは危惧していたのだ。

フィルの言葉にシェリルはコクリと頷く。コミュニケーション不足な所を除くとシェリルは特に問題行動などは見当たらないので、指摘する必要もない。

フィルは頷くと、次はアイゼリアに視線を向けた。フィルの視線がアイゼリアに向いた瞬間、彼女はビクツと体を痙攣させ、縮こまってしまう。指摘すべき問題はここだ。

「アイゼリア、君は自虐思考が強すぎる。成績優秀、問題行動も特に無いのだからもう少し自分に自信を持ちたまえ」

どうやら思い当たる節があるらしく、アイゼリアは『は、はい……』と返事を返すとうつぶむいてシュンとしてしまった。

「それがいけないのだ、アイゼリア。もっと私のように自信を持って胸を張りたまえ」

フィルは直立のまま一層胸を張って堂々たる態度をとってみせる。

「……………虚勢……………」

間髪入れずシェリルがぼそりと呟く。相変わらず鋭いつっこみは健在だ。

「何を言うか、シェリル。私は確かな実績に基づいて自らを誇っているだけで……………」

「……………空意地……………」

「むう……………君も反抗期なのか……………？」

腕を組んで考え込むフィルに、アイゼリアはおずおずと問う。

「あ、あの……………反抗期って？」

「うむ……やはり年頃の女子が反抗期を迎えるのは人間の成長上仕方ない事ではあるが、こうも皆が反抗期では……私の教育が間違っていたのだろうか」

フィルは近くにあつた椅子に腰掛け、そのまま動かなくなつてしまつた。

「隊長、それは違いますよ」

アイゼリアが、彼女には珍しく強い口調で言葉を發した。少し驚いた表情で顔を上げるフィル。アイゼリアは微笑むと、更に言葉を紡いだ。

「ワルキューレ達の皆さんはみんな隊長の事を想っています。少し素直になれないだけで……。例えばラピスさんは隊長が営倉にいた間、ずっと私達の生活や健康を気にかけてくれて、日に一度は必ず部屋に顔を出しに来ます。もちろん、ミーナさんの部屋もです。ラスリさんは隊長が営倉から帰ってきたら褒めてもらえるような發明をするんだって意気込んでました。ミーナさんは隊長がいない間、隊長の代わりに率先してみんなの指揮をとって自主的にトレーニングしたり授業をしてくれます。エリシアさんに至っては隊長の事ばかり心配してますよ」

クスクスと楽しそうに笑うアイゼリア。なぜかその言葉には聞き手が思わず信じてしまうような、そんな響きが宿っていた。そしてそれは偽りではなく、紛れのない事実。

「だから自分が間違つてゐるなんて言わないでください。私達はなんだかんだいって、あなたをお慕ひしてますから……」

言葉の最後の方でアイゼリアが頬を赤らめていたのは、それがみんなの気持ちを代弁するという名目で放った自分の気持ちだからだろうか。

「そうか……私は間違っていないのか」

フィルのその言葉に、アイゼリアは『マズいっ!?!』と直感的に思った。

「……言い過ぎた……このままでは彼は調子に乗ってしまう!!
アイゼリアは慌てて『多少変わってくれてもやぶさかではない』事を伝えようと言葉を選び始めたその時――」

ドオン!!

「大体アンタはいつつもいつつも文句ばかり!!たまには素直に人の話を聞きなさいよ!!」

唸るアングウイス。

「うっさいわね!!それはそっちも同じでしょ!?!」

吼えるピースメーカー。

隣の部屋の壁を突き破り、乱入してきたのはラピスとミーナだった。手にはそれぞれの得物が握られ、使い手の敵を討伐せんと猛っている。

そのまま二人は窓側の壁を破壊し、外で交戦を始めた。その様子を呆然と眺めるフィルとアイゼリア。だが悲劇はこれだけに留まらなかった。

刹那、大爆発。

わずかに被害を免れた校舎を吹き飛ばし、黒煙をあげる一室。ラスリの部屋だ。

爆発と同時に煙の尾を引いて地面に落下するラスリ。

「うにゅ〜……やっぱり量を間違えたみたい……」

その言葉を最後にラスリは地面に突っ伏したまま動かなくなった。何の量を間違ったのかは、聞かずとも手に取るようにわかる。

そして忘れてはならない脅威がもう一人。フィルにとってはこれが致命傷である。

「こんな所にいた〜！お兄ちゃん！〜」

フィルの背後から烈火のごとき勢いで腰元に抱きつく赤毛の少女――エリシアだ。服装は制服などではなく、さっきより数倍気合いの入ったゴシックドレスに変更されていた。

「やっと見つけたよお兄ちゃん！さ、デートしょ？」

呆然とした表情で固まったままのフィルをエリシアはズルズルと引きずり、部屋を出て行った。

一瞬のうちに自分の言った事が全て間違いにされてしまったような気がして、アイゼリアはため息をつく。

「シェリルちゃん……私、間違った事言っただかな？」

シェリルは頭を左右に振り、否定の意を表した。そして小声で、呟くように言った。

「……前途多難……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5734b/>

Wa l K u r e h e a r t ' s

2010年10月10日03時22分発行